

2013年1～2月掲載分

習志野 大慈弥 爽子  
滝凍てて岩肌縮みあがりたる  
美しき雪に乱るる旅の足  
年の瀬の意気込み渦をなす市場  
残雪の解けぬ固さをずべる風  
はねてはづんでころがって囀れる

藤沢 藤田 富子  
岩肌に苔も枯れ果てをりにけり  
街道の木々の霜除け藁団  
恙なき暮らし支へて師走来る  
冬紅葉燃えて水面を彩れり  
顔見世や墨痕新た勤亭流

さいたま 宮崎 美智子  
見舞終へ廻り道して冬桜  
届けらる葱に深々土をかく  
クリスマス気張りて子等にプレゼント  
冬咲きの皇帝ダリア目もあやに  
牡蛎を食む脳によきとや師を囲み

町田 小森 まさひこ  
下の句を読んで取りたる歌留多かな  
雪しまく六百方里の果てまでも  
比良越へて湖渡る風義仲忌  
孤高てふ一輪の花冬薔薇  
水仙や湘南に住み身ごもりぬ

2013年3～4月掲載分

習志野 大慈弥 爽子  
湿り香の土黒々とももの芽出づ  
踏みしむる歩に濃く匂ふ春の土  
瀬に淵に鳥遊ばせて水の春  
落日の流れに匂ふ夕桜  
惜春の歩に風少し雨すこし

藤沢 藤田 富子  
福は内ばかり唱えて豆を撒く  
豆撒くや年の数ほど食べられず  
悠々と鴨おだやかに波の綺羅  
残雪の街の片隅汚しをり  
冬木の芽少しふくれし墓域かな

さいたま 宮崎 美智子  
句を語り書を語り会ふ春炬燵  
菜の花をたっぷり活けて明るかり  
立話乙女椿の垣根ごし  
初午や火伏の凧のよく売れて  
百年の樹齢の梅のさかりなり

町田 小森 まさひこ  
三月や万象嬉々と動きそむ  
安曇野の清き流れや山葵生ふ  
芹摘や買い手のつかぬ分譲地  
流水の去り豊穰の海戻る  
たんぽぽの色に希望の生まれそむ

2013年5～6月掲載分

習志野 大慈弥 爽子  
セルを着て肩の力を緩めたる  
吐く糸の光の静寂繭育つ  
体重を少し落として更衣  
柿若葉揺れて太古の石の謎  
たゆたえる浮巢に育める命

藤沢 藤田 富子  
人混みを避けて家傍の花筵

2013年7～8月掲載分

習志野 大慈弥 爽子  
一撃に天地をつなぐはたた神  
秋近し星影ゆっくりと動く  
甘くなる西瓜に重くなる畑  
揚花火豪華に闇をはみだせる  
花火果て力のぬけてゆく夜空

藤沢 藤田 富子  
善くまき悉御秋竹蒔苳

沿線に一行埋める桜かな  
花を愛づことは建前酒の宴  
花屑をかき集め撒きはしゃぐ子ら  
咲けば散る風情を仰ぐ桜かな

さいたま 宮崎 美智子  
義士祭たっぶり渡さるお線香  
ふららこを低くゆらして語りをり  
夕まぐれ甘酒頂く我が一人  
み仏にたっぶり灌ぐ甘茶かな  
恋猫の恋の邪魔する老婦かな

町田 小森 まさひこ  
瓜苗の日に蔓伸びる店の先  
新緑に染まる白衣の歩み来る  
神域に常磐木紅葉の降りやまず  
高原の日差しに伸びる夏蕨  
豆入れて量をましたる飯となる

老鶯の谿に笹の清々し  
緑蔭に風と語りてつどいをり  
本棚に読みかけの本桜桃忌  
日に燦を野山のみどり際立てり

さいたま 宮崎 美智子  
大蟻の急ぎもどりぬ蟻の塚  
夜の庭に白仙人掌の白花浮く  
しゃっきりと祭衣装の娘が二人  
山門の闇に螢の火の肩に  
家の子もさんさ踊りに加わりぬ

町田 小森 まさひこ  
斑鳩塔遠望に雲の峰  
山門に守宮動かぬ午後の寂  
開け放つ扉からくる涼と香  
涼しげな菩薩眼に迎えらる  
雲中像に汗吸い込まれいく時間

2013年9～10月掲載分

習志野 大慈弥 爽子  
菱の実の魔女の爪先めく尖り  
爽涼の風をつないでゆく歩み  
目を剥いてこほろぎ髭をふりたてる  
剥落を曝す仁王の目の秋思  
ひまはりのどう包んでもはみだせる

藤沢 藤田 富子  
急流に鮎の銀鱗光りをり  
竹林を風の涼しく渡りゆく  
湘南に人溢れをり夏休み  
日中の外出をさけ耐暑かな  
蟬時雨子等の声消す屋下り

さいたま 宮崎 美智子  
ねぶた終へそこはかたなく秋意かな  
硯洗ふ師の筆跡をひたすらに  
さぎ草の飛び立つさまを賞でにけり  
緑陰に入りて深々息つきぬ  
老の背を深々丸め胡麻叩く

町田 小森 まさひこ  
降るところ降らざるところ秋出水  
少しづつ買い揃えて震災忌  
遠山は多摩の横山葛の花  
主なき庭に咲き継ぐ萩なりし  
季節感感じる時や杜鵑草

2013年11～12月掲載分

習志野 大慈弥 爽子  
大綿の青き命を透く夕日  
宝物めく一輪の返り花  
青くなる空深くなる散り紅葉  
大とろは炙りが良しと鮓売り夜  
思い出のワインの香りクリスマス

横浜 稲田 涼子  
対馬灘程よく荒れて鯽起し  
雪吊の縄の軋みに緊る景  
この歳で何にせかるる十二月  
熱爛に独り舌焼くやもめの夜  
三井の晩鐘蕭々と聞く大枯野

藤沢 藤田 富子  
好天に尾根くっきりと秋の山  
葡萄棚一房ごとの重さかな  
秋雨に見馴れし傘の迎えかな  
飛行機雲見上げる空の高きこと  
子蠶螂たよりなげなる鎌もたげ

さいたま 宮崎 美智子  
慈母観音乳房の嬰を包む秋  
秋櫻子の足跡を聴く秋惜しむ  
殺生石へ子と学習す時雨なか  
那須野路の山裾遠し霧襖  
助けむとする手を拒む残る蟬

町田 小森 まさひこ  
東京に住むこと長き酉の市  
三かける三と咲きたる花八手  
黄落に道のうずまる丸の内  
新装の東京駅に紅葉の黄く  
江戸堀の岸を打ちたる師走波